

# ユダヤ人移民二世アーヴィング・ゴフマンと彼の著書『スティグマ』 二十世紀の北米ユダヤ人の社会的地位の変化がゴフマン社会学に与えた影響

著者	薄井 明
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部紀要
号	26
ページ	1-16
発行年	2019-12-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00064772/">http://id.nii.ac.jp/1145/00064772/</a>

## <論文>

# ユダヤ人移民二世アーヴィング・ゴフマンと彼の著書『スティグマ』 —二十世紀の北米ユダヤ人の社会的地位の変化がゴフマン社会学に与えた影響—

薄井 明\*

抄 録：本論考は、アーヴィング・ゴフマンの著書『スティグマ』をそれが執筆された歴史的  
文脈および彼の個人的文脈に置いて考察する試みである。『スティグマ』が出版された1963年  
はゴフマンがカリフォルニア大学バークレー校の教授に昇進した直後であるが、彼は戦時中カ  
ナダで反ユダヤ主義のためにマニトバ大学を中退している。第二次世界大戦末ピークに達した  
北米の反ユダヤ主義の風潮は、大戦後急速に退潮していった。ゴフマンが本書を執筆したと  
き、ユダヤ系米国人を取り巻く社会的環境は劇的に改善し、合衆国はユダヤ人差別のない場所  
になりつつあった。しかし、当時ゴフマンを含むユダヤ系米国人の大多数は、彼らの社会的地  
位はアングロサクソン系白人と同等にはなっていないと感じていた。以前ユダヤ人に貼られて  
いたスティグマも薄れてきているけれども、まだ消えてはいなかった。ユダヤ系米国人の間で  
行われた姓名変更が『スティグマ』で「塗り隠し」と呼ばれた適応的で防衛的な戦術である一  
方で、「なりすまし」は二十世紀前半に肌の白い混血の黒人と、米国社会に完全に同化しよう  
としたユダヤ人が用いた一種の扮装であった。E・ゴフマンは、反ユダヤ主義の消長を目の当  
たりにし、反ユダヤ主義による下降的社会移動と自力による上昇的社会移動の両方を経験し、  
スティグマ者たちの間に存在する差別とノーマルな人たちの間に存在する恥ずべき差異性を  
知った結果、最終的に「ノーマルな人とスティグマ者とは個々の人物ではなく、むしろ個々の  
パースペクティブである」という理解に至った。

キーワード：アーヴィング・ゴフマン、ユダヤ人移民、反ユダヤ主義、ユダヤ系米国人、『スティ  
グマ』、なりすまし、塗り隠し

### 1. はじめに

アーヴィング・ゴフマンが『スティグマ (Stigma)』  
(Goffman 1963b) を著したのは精神病患者や身体障害  
者をはじめ「社会的に不利な立場に置かれた人たち」に  
彼が関心を抱いていたからだ (Gardner 1999:44) といっ  
た説明がなされることが少なくない。この説明は間違い  
ではないが、説明としては中途半端である。というの  
も、これでは、なぜゴフマンがそうした人たちに関心を  
抱いたのかという、もう一段深い次元の疑問に答えるこ  
とにならないからである。この後者の問いに対する妥当  
な答えの一つとして「東欧系ユダヤ人カナダ移民二世で  
あった彼自身が社会的に不利な立場に置かれた経験が

あったからだ」という説明が考えられる。

「ウクライナ出身のユダヤ人移民の子であったE・ゴ  
フマンと彼の著書『スティグマ』との関連性」。ゴフマ  
ン研究者なら誰でも思いつきそうな問題設定だけれど  
も、意外なことに、この問題を正面から扱った研究は皆  
無である。そもそも「ユダヤ人E・ゴフマンと彼の社会  
学理論との関連」という問題がほとんど手つかずの状態  
で放置されてきた<sup>(1)</sup>。筆者は、ゴフマン研究のこの「空  
白」に対して、戦前の北米で1930年代から40年代前半に  
かけて強まったユダヤ人に対する「社会・経済的な排斥」  
(佐藤 2000) の結果、E・ゴフマンが「化学」の勉強の  
ために入ったマニトバ大学で学業を途中で断念してい  
くことになり、そのときのドロップアウトの体験が論文  
「カモをなだめること」(Goffman 1952) を書かせる原  
体験となったという仮説を提出した (薄井 2018)。

では、『スティグマ』はどうか。確かにこの作品は「ユ

\* 全学教育推進センター

「ユダヤ人移民二世」アーヴィング・ゴフマンの境遇と関係が深いと予想されるけれども、実際のところ『スティグマ』において「ユダヤ人」への言及は量的に少なく、ユダヤ人に関する記述内容も印象に残らないものである。したがって、文献上の記述だけを資料として考察しても、早晚その研究は袋小路に入り込むのが目に見えている。このテーマを扱った研究が皆無であったのも、おそらく、こうした点が関係している。

そこで、本論考において筆者は、迂回的な形で、しかも限定された視点から、ゴフマンの『スティグマ』[以下「本書」とも表記する]にアプローチしようと思う。すなわち、迂回的な形とは、本書が執筆された時期の社会状況やさらにその歴史的背景を参照することによって、些末にみえるが重要な情報を拾い上げ、文面からではわからない記述の意味やその含意を探るということである。また、限定された視点とは、東欧系ユダヤ人移民二世であったE・ゴフマンを含め、戦前・戦後を生きた北米のユダヤ人たちの社会状況を導き糸として『スティグマ』を読み解いていくということである。

そのために、次節「2」でまず、第二次世界大戦終結後の米国において反ユダヤ主義の風潮が急速に弱化していった流れを概観する。そして、大戦中一時ドロップアウトしたE・ゴフマンが、戦後米国社会の変化の時期に彼の人生行路をいかにして軌道修正していったかについて素描する。これらの情報を踏まえて、彼が『スティグマ』を執筆した時期の（ゴフマンを含む）米国のユダヤ人の社会的地位が実際はどのような状態であったのかを判断する。続く次の節「3」で『スティグマ』を読解していくが、そこでは最初に、ゴフマンの問題意識と本書の記述の外見とに乖離が生じている理由を彼の方法論と叙述方法から解明して、『スティグマ』の中心的な位置に「ユダヤ人」の存在があるという本書読解の基本的な視座を確認する。そして、『スティグマ』の中のユダヤ人に関する記述を整理した上で、本書の見かけの背後にあるユダヤ人の実相を掘り出していく。さらに、『スティグマ』で有名になった概念「なりすまし（passing）」と「塗り隠し（covering）」に焦点を当てて、それらの概念と戦前・戦後のユダヤ人および黒人のサバイバル戦術との関係を解明する。最後に、戦前と戦後で大きく変化した北米ユダヤ人の社会的地位の双方をゴフマンが経験したことから彼は「スティグマ性の可変性」の認識を得、さらに「スティグマ者の相対化」と「ノーマルな人の相対化」を経て、「スティグマとはパースペクティブである」との重要な認識に至ったことを論じる。

## 2. 第二次大戦後の米国ユダヤ人の境遇変化とアーヴィング・ゴフマンのその後の人生行路

### （1）第二次大戦終結と米国の反ユダヤ主義の退潮

1930年代末から40年代前半に「最高潮」に達した北米における反ユダヤ主義（Dinnerstein 1994：128-149）は、第二次世界大戦終結直後から急速に退潮していった（本間 1998：76）。この大戦が「総力戦」だったことから、特に軍隊内では人種・民族や宗教・宗派の違いよりも「米国人」としての一体感が醸成され、種々の偏見が弱まる傾向にあったこともその一因である。しかし、ユダヤ人に対する非ユダヤ系米国人の態度を大きく変化させるきっかけとなったのは、欧州でナチスが行った「ホロコースト」の実態を多くの米国人が知ったことである（Silberman 1985=1988：148）。反ユダヤ主義が行き着くおぞましい事態を目の当たりにした米国人は、ユダヤ人に対する差別的態度を改めたか、内心は反ユダヤ的感情をもっていてもその表明を憚るようになった。世論調査の数字を見るかぎり、ユダヤ人への差別と排斥の風潮はかなり弱まったようにみえる。

態度の変化は、二段階を経て起こっている。第一段階は短期的で突然やってきた。第二次大戦中にその頂点を迎えた反ユダヤ主義は、少なくとも世論調査で判断するかぎり、戦後急に衰えた。ユダヤ人を“アメリカへの脅威”と考えたアメリカ人の比率は、1944年の24%から1950年の5%に減っている。また「過去6ヵ月間にユダヤ人への批判や非難を聞いた」と報告した者の比率は、1946年の64%から1950年の24%に、6年後には11%に落ちている。（Silberman 1985=1988：147-148）

G・ペック（Gregory Peck）主演で1947年公開の米国映画『紳士協定（Gentleman's Agreement）』が好評を博し、アカデミー作品賞他を受賞したことに象徴されるように、この時期、ユダヤ人に対する「社会・経済的な排斥」を問題視し、それを改善しようとする動きが出てきた。そこには、戦後「超大国」となっていった米国の経済的繁栄も関係している。経済成長に伴い大量の理系高学歴者が必要になった米国の大企業は、従来のようなユダヤ人排斥を続けていくわけにはいなくなったのである。それは理系のユダヤ人学生の進路を多様化させ、入学者選抜の「クォータ・システム（割当制）」を削減させることになる。戦前「医学」に集中していた優秀な理系のユダヤ人学生が戦後「物理学」や他の専攻分野に進出し、その数は増えていった。その結果、メディカル・スクールの入学志願者が激減して、クォータ・システムを厳し

く適用していた「医学」分野でこのシステムを維持する必要性がなくなったのである<sup>(2)</sup>。

また、「復員兵援護法 (the G.I. Bill)」によって終戦直後から大学に入ってきた膨大な数の復員学生たちは、クォータ・システムを支えてきた従来の学生文化を刷新していった。年齢が高く、職業志向が強く、軍隊生活で人種的・宗教的偏見が弱められた復員学生は、戦前の典型的な学生とは対照的であった。彼らは、大学内で差別されてきたマイノリティのユダヤ人学生を“援護射撃”する存在となったのである。

彼ら〔復員軍人出身者—引用者〕が学園生活に与えた影響のなかでも最も重要な点は、人種的・宗教的差別意識に満ち満ちた学生友愛会が維持してきた学生集団内の階層構造を破壊したことである。差別的な学友会のあり方と、その活動に反対する一般学生側の抗議運動は大战終結直後から始められたのだが、その担い手こそ復員軍人学生にはかならなかったのである。(佐藤 2000 : 176)

こうした流れの中で、ユダヤ人の団体もクォータ・システムなどの反ユダヤ主義的措置への反対運動を展開した。その成果の一つが1948年にニューヨーク州で制定された「公正教育実施法 (the Fair Educational Practices Act)」であった。

この法律は同州内にあるすべての高等教育機関に適用され、入学を求めるいかなる者に対してもその人種、宗教、皮膚の色ゆえに、これを排斥することを禁止しており、違反した教育機関に対しては、免税措置を取り消すなどの罰則規定も定めていた。(佐藤 2000 : 177)

この事例をはじめとして、公然としたユダヤ人排斥は戦後の米国社会から姿を消していき、1950年代を通してユダヤ系米国人が自由に職業を選択できる社会状況が徐々に生まれていった。そして1960年代以後、企業においても多数のユダヤ系米国人の大卒学生やビジネス・スクールの卒業生が雇用された。ユダヤ系米国人の雇用に関しては「属性」より「業績」「実力」に基づいて判断されるようになっていったのである。このような状況下、東欧系ユダヤ人移民の二世・三世の社会的進出、特に学術界における彼らの進出は目覚ましかった。その背景にあったのは、高等教育の急速な大衆化である。

学術界での劇的な変化が始まったのは、大学入学者のブームが教授陣の幾何級数的な増加を必要とするよ

うになった、第二次世界大戦直後のことである。1969年までにユダヤ人はアメリカの全大学の教職者の9%を占め、エリート大学の教職者の20%を占めていた。社会学、人類学、心理学、生化学、医学、法律などの分野では、ユダヤ人の比率はさらに高い。(Silberman 1985 = 1988 : 134-135) [傍点は引用者]

## (2) アーヴィング・ゴフマンの戦後の人生行路

大戦中、反ユダヤ主義の風潮のためマニトバ大学を中退し(薄井 2018)、オタワにあるカナダ国家映画委員会(NFB : the National Film Board)で働いていたE・ゴフマンが大学に戻ってくるのは、北米における反ユダヤ主義の退潮期にさしかかる時期であった。

1944年の夏、ゴフマンはトロント大学の学生D・ロング<sup>(3)</sup>とNFBで出会った。このときすでにゴフマンは「中断していた勉強をトロント大学に入って再開し、必要な学士号を取得しようと計画していた」(Wrong 1990 : 9)ので、高名な学者の家系に生まれたトロントのエリート学生ロングの話は、ゴフマンにとって貴重な情報になったはずである。一方、祖父や父のように将来「研究者」になる進路を考えていたD・ロングからすると、その彼が舌を巻くほどのゴフマンの読書量や理論的バックボーンを知るにつれて、ゴフマンは「研究者」になるべきだとロングは考え、その進路を強く勧めたのではないかと推測される。このときのゴフマンの姿をロングは次のように記している。

彼〔ゴフマン—引用者〕について私が知っている話は他のどの人よりも早い時期に遡る。(……)ゴフマンは直観的で純真な人で、社会に対する並外れた観察力をもった小説家だという観念が流布しているが、それは全く誤りである。私が彼に会ったとき、すでに彼は鋭敏でスケールの大きい理論的知性をもっていた。彼は私たちの誰より知的にずっと進んでいた。私が原典に当たらず教科書や通俗書を読んでいたため彼に非難されたことを覚えている。(Wrong 1990 : 9)

一度は研究職への途を断念したゴフマンが再びその気持ちを抱いたと筆者は想像する。ただ、当時の彼の心の中に「哲学」や「化学」という選択肢はなかった。このときロングの勧めでゴフマンは「社会学」の途に進んでいったようだが(Wrong 2011)、ゴフマンがなぜ「社会学」の勉強の途を選んだのか、こうした外面的な事実だけでは、彼の心の内まではわからない。

その後、ロングの尽力もあって、ゴフマンは1944年の夏以降トロント大学ユニヴァーシティ・カレッジの政治経済学部編入学し、そこで社会学や人類学を中心に貪



欲に学んでいった（薄井 2017：42-45）。

こうして、マニトバ大学2年目の途中以降連続的に経験した下降的地位喪失の動きは停止し、ゴフマンの人生行路は徐々に上向いていった。人口約100万人を擁した世界都市トロントの大学で、D・ロングやE・ボット<sup>(4)</sup>といった知的エリート層の子弟との交流を通して、彼の社会的視野が広がっただけでなく、失われかけた自信も回復していったようだ。伝えられるトロント大学時代の情報からは、“尊大”にさえみえる、自信に満ちた彼の姿が想像できる。次の情景は、ハーヴァード大学のT・パーソンズ（Talcott Parsons）の出張講義を聴講したときのゴフマンの様子である。

仲間が記憶していたもう一つの面は、ゴフマンが完全な意味で並外れた読書家だったということである。ある世代の思想的指導者になろうとしていた米国の社会学者タルコット・パーソンズが学部で講義をしに来ていたその日、パーソンズは教室の後部座席に座っている学生〔ゴフマン—引用者〕から弾幕射撃を受けるとは全然予期していなかった。この学生はパーソンズの著作を全て読んでいるようであったが、ホワイトヘッドの認識論的著作に依拠してパーソンズの著作を批判したのである。（Winkin 1988：25，訳：30）<sup>(5)</sup>

トロント大学を修了したゴフマンは渡米し、1945年秋、シカゴ大学社会科学部大学院修士課程に入学した。修士論文提出に4年かかるなど（薄井 2011：67-75）、彼の学究生活はつねに順調だったわけではないけれど、研究者としての前途は必ずしも暗くはなく、着実にアカデミアで実績も積んでいった。修士論文が完成した1949年秋、ゴフマンはエディンバラ大学社会人類学科の助手になり、同時期実施のシェトランド諸島でのフィールドワークに基づく論文で1953年シカゴ大学から社会学の博士号を取得している。彼は1954年から57年まで米国国立精神衛生研究所の客員研究員を勤めたのち、1958年カリフォルニア大学バークレー校の客員助教授に就き、59年准教授、62年正教授になった。最初の著書『日常生活における自己呈示』（Goffman 1959）は多数の読者を獲得し、1961年にマッキーヴァー賞を受賞した。その後『アサイラム』（Goffman 1961a）、『出会い』（Goffman 1961b）、『公共の場における行動』（Goffman 1963a）と、彼は主著を次々と出版していった。ゴフマンが『ステイグマ』を執筆し公刊するのはこうした時期である。

### （3）「ユダヤ人」E・ゴフマンにとっての1940年代後半から60年頃の米国

このように、戦後のゴフマンの人生行路は上向きに変

わり、ユダヤ系米国人を取り巻く社会的環境も好転していった。しかし、米国のユダヤ人を取り巻く社会的環境が急速に改善していったことが事実だとしても、「米国においてユダヤ人差別は解消した」とはいえない実態が存在していた。ユダヤ系米国人を「脅威」と感じる非ユダヤ系米国人の警戒心は表面にこそ現れなくなったが、潜在した形では残存していた。また、反ユダヤ主義を声高に叫ぶ勢力は、社会の主流ではなくなったものの、少なからず残っていた。

1948年の調査の際、「なにがしかの集団が成員の数に不釣り合いな影響力を行使していると思うか」と問われて、「ユダヤ人」と自発的に答えた人はわずか4%だったのに対し、調査員が前もって「ユダヤ人」に言及した上で同じ問いを行った場合には、その割合が67%に跳ね上がった。（Poliakov 1994=2007：394-395）

反ユダヤ主義の驚くべき急速な退潮がありながら、反ユダヤ主義は完全に消えたわけではなく、1950年には五十七の反ユダヤ主義団体が依然として存在していた。（本間 1998：79）

実際、1950年代後半から60年代前半の米国では、「黒人」に対する横暴な人種差別が南部諸州を中心にまだ蔓延していたし、1950年代半ばに始まった「公民権運動」は白人側の頑強な抵抗や反撃との辛抱強い闘争の真ただ中にあった（バーダマン 2007）。WASP中心だった米国においては白人でも「カトリック」は冷遇されてきたし、カトリックで初にして唯一の米国大統領J・F・ケネディ（John F. Kennedy）が誕生したのは1961年のことである。そのケネディ大統領も在任中の1963年に暗殺された。したがって、ユダヤ系米国人にとって当時の米国は“安息の地”になっていない。というか、反ユダヤ主義の消長にあまり関係なく、ユダヤ人はつねに警戒心を持ちながら生きていたのである。

だからアメリカのユダヤ人は、一度は信じたように、自分たちがはたして安全であるかどうかを疑い、彼らの地位は崩れつつあり、将来アメリカは、近年見せていたほどのよいもてなしをユダヤ人に対してしなくなるのではないかと懸念する。ひっきょう、ユダヤ人が栄え受け入れられる期間と、窮乏と迫害の期間の交替は、ユダヤ人の歴史に反復されてきた主題にはかならないのだから。（Silberman 1985=1988：5）

ゴフマンがカリフォルニア大学バークレー校に勤務し

ていた1960年代初頭に大学院生に語ったとされる以下の発言は、ユダヤ系米国人に対する社会・経済的な排斥が姿を消しつつあった当時の米国の社会状況に対する「ユダヤ人」ゴフマンの率直な評価であった。

彼〔ゴフマン—引用者〕は、カトリック、ユダヤ人、黒人など劣位に置かれてきた出自の人々が、以前は彼らに門戸が閉ざされていた世界に「侵出していった」のはつい最近の出来事であり、いつ取り消されるかわからない不安定なものであることをよく知っていた。  
(……) 物事は見かけほど楽観的ではなく、うわべだけの礼儀正しい受け入れはあなたのような種類の人たちに対する本当は醜い態度を覆い隠すものだということを、彼は聞き手に思い出させて楽しんでいるようだった。(Marx [1984] 2000 : 67) [傍点は引用者]

このような歴史的状況に置いてみれば、戦後ユダヤ系米国人の間で「鼻の整形」と「姓名変更」が流行したという現象の意味も理解できる。米国でユダヤ人に対する差別意識が和らいでいった状況でも、「成功」への途を歩もうとしているユダヤ系米国人が求めたのは「ひどく目立つこと (obtrusiveness)」の回避であり、それがユダヤ的な特徴を薄めていくことであった。

ユダヤ人の受け取ったメッセージは、受け入れられるにはユダヤ人であることをやめなくてはならない、もしくは、あまりユダヤ人らしく見えることを慎む、ということであった。ここから、鼻の整形、つまり、わしのようなユダヤ人の鼻を上向きに変形して、アングロサクソン系に見せる (……) 手術が人気を得た。  
／ (……) 名前を変えることもおおいに流行した。1940年代の終わりから1950年代の初めにかけて姓名変更がピークに達した時は、およそ5万人のアメリカ人が、苗字変更の許可を求める請願書を州裁判所に提出した。その80%がユダヤ人であった。(Silberman 1985 = 1988 : 67-68)

ユダヤ系米国人の間で行われた「姓名変更」は、ユダヤ系の姓をアングロサクソン風に変えるものであった。例えばゴールドバーグ (Goldberg) をゴールド (Gould) に、ウェインSTEIN (Weinstein) をウィンストン (Winston) に、ラビノウイツ (Rabinowitz) をロビンズ (Robins) に変更した人がいた。また、米国の女優ジル・セントジョン (Jill St. John) の本名はジル・アーリン・オッペンハイム (Jill Arlyn Oppenheim) というユダヤ姓だったが、彼女が十代のとき母親がアングロサクソン姓に取り替えたい。この「姓名変更」の問題は、『スティ

グマ』における代表的な概念と関係している。

### 3. 『スティグマ』と「ユダヤ人」

#### (1) 『スティグマ』執筆の契機としての「ユダヤ人」の境遇と『スティグマ』の叙述内容との落差

上記のような時代状況を考えれば、ゴフマンが『スティグマ』を執筆する際、(自らも含めた) 北米のユダヤ人が置かれてきた戦前の社会状況、そして1950年代から60年前後のユダヤ系米国人の社会状況を意識していたことはまず間違いない。また、それを裏付ける60年代初頭のゴフマンの発言を、カリフォルニア大学バークレー校大学院の教え子が伝えている。

上昇移動する「我々のような人々」と皮肉交じりに言及したり、大学などのエリート機関で増えつつある成員たちのことを「スティグマを押された民族的アイデンティティ」と背景をもつ人々が「文明化された」者 (“detrified” persons of “stigmatized ethnic identity” and backgrounds) と彼〔ゴフマン—引用者〕が冗談半分に言及していたことを私は覚えている。  
(Marx [1984] 2000 : 67)

さらにこのことを文献的に裏付けるのが、「スティグマ」の三類型の一つとして「人種、民族、宗教による種族的なスティグマ」(Goffman 1963b : 4, 訳 : 18) を挙げている点である。この記述箇所では挙げられている具体例は脚注で言及されている「(特に英国の) 下層階級」だけであるが、この類型にユダヤ人が含まれているのは明らかである。実際、『スティグマ』において「ユダヤ人」に関する記述は複数存在している。また、ゴフマンが種族的スティグマとして「ユダヤ人」を想定していたことは、先に引用した「カトリック、ユダヤ人、黒人など劣位に置かれてきた出自の人たち」(Marx [1984] 2000 : 67) とのゴフマンの発言からも傍証される。

しかし、その一方で、『スティグマ』ではユダヤ人への言及は量的に少なく、ユダヤ人に関する記述もあまり印象的ではないという実態がある。一見すると、このことは、ゴフマンが『スティグマ』執筆の際にユダヤ人の状況を意識していたという筆者の主張と矛盾するようにみえるが、必ずしもそうではない。理由は大きく三つある。一つ目の理由は、戦前から終戦直後のWASP中心の米国において「ユダヤ人」がスティグマと見なされていたことは周知の事実であったということである。その時代を生きていた人たちにとって当たり前の事実を、殊更書き記す必要はなかったと考えられる。

二つ目の理由は、ゴフマンの分析スタンスと叙述方法

にある。彼が本書において追究しているのは、個々のスティグマの特殊性や特定のスティグマに固有の問題ではなく、スティグマを押された多種多様な人たちに共通する対面的状況や相互行為、集団形成の「構造」または「形式」の抽出にある。そうした分析スタンスは、例えば次の文に要約されている。

異なるスティグマをもつ人たちはかなり類似した状況に置かれており、またかなり類似した仕方で反応すると想定してよい。(Goffman 1963b : 130, 訳 : 220)

『スティグマ』の引用文や例には、以下の人たちが取り上げられている。肢体不自由の人、盲目の人、難聴の人、聾者、片足を切断した人、人工肛門装着者、吃音の人、小人症の人、静脈血斑がある人、ハンセン病患者、元精神病院入院患者、知的障害者、麻薬常用者、同性愛者、前科者、犯罪者、売春婦、アルコール依存症者、職業的絞首刑執行人、ユダヤ人、黒人、メノー派、ロマ [ジプシー]、下層階級、等々。通常の観点では、これら多様なスティグマの違いのほうに目が行き、別種の事例が脈絡なく並列されていることに違和感すら覚える。しかし、ゴフマンがここで用いている叙述方法が「異事象併置による透視図法 (perspective by incongruity)」だとすれば、こうした変則的な叙述は、異質で無関係にみえる諸事象の併置によってそれらの重なりの中に見えてくる同型の構造を可視化しようとする彼の意識的な叙述方法だということになる (薄井 2016 : 5)。

この観点から見れば、『スティグマ』の記述の多くが「ユダヤ人」にまつわる状況の記述としても読めるということである。というのは、本書ではユダヤ人以外の事例を使ってユダヤ人にも共有された同型の構造が示されている可能性が高いからである。著者は以前「ゴフマンの著書『スティグマ』には「脳性麻痺者」に仮託して自らの体験を述べているとも読める体験談が引用されている」(薄井 2018 : 7) との解釈を提出したが、ゴフマンの叙述方法に照らせば、この解釈もあながち“荒唐無稽”とはいえない<sup>(6)</sup>。

三つ目の理由は、ゴフマン特有の“ひねった”書き方である<sup>(7)</sup>。彼の著作には、強く影響を受けている思想・理論を表面上そのようにみえないように書くというスタイルが見出せるが (薄井 2013 ; 2017)、『スティグマ』においてこれに準じたスタイル、すなわち、強く意識している事柄をあえて前面に出さないというスタイルを彼が採っているのではないかということである。筆者がそう考える根拠として、本書における「黒人」の扱い方がある。公民権運動が全米的に話題となっていた60年代初頭の社会状況を考えれば、「種族的スティグマ」の焦点

になっていたはずの「黒人」に関する記述が目立っていてよいのに、『スティグマ』では言及数も少なく、叙述上の存在感はかなり薄い。現実世界では大きな話題となりゴフマンも無関心でいらなかったと思われる事柄が本書においては周辺的な取り扱いになっている。このように内心と表現が乖離した書き方が採られているとすると、『スティグマ』におけるユダヤ人への言及の少なさは、ユダヤ人の状況を意識していないことの表れではなく、内心では「ユダヤ人」の状況を意識していることの表れではないかという推測も十分に成り立つ。

以上、三つの理由から『スティグマ』を読んでいく基本的な視座が導き出される。すなわち、『スティグマ』の記述では「ユダヤ人」は前面に出ていないけれども、情況証拠や彼の叙述方法などから、ゴフマンは「ユダヤ人」を「種族的スティグマ」および「スティグマ」全般の中心的位置に据えていたという見方である。また、当時「種族的スティグマ」の焦点であった「黒人」の問題も、彼が本書を執筆する上で重要な契機になったと推測され、その点も看過すべきでない。

## (2) 『スティグマ』におけるユダヤ人に関する記述

こうした視座に立って『スティグマ』を読んでみると、見かけの印象とは異なって「ユダヤ人」の問題が存在感をもっていることに気づく。もちろん「異事象併置による透視図法」の考え方を前提にすれば本書の相当箇所では“深い”読みが可能だが、ここでは『スティグマ』に直接書き表されている「ユダヤ人」の記述を確認しておこう。これには三つのパターンがある。一番目のパターンは、明示的な例証である。二番目のパターンは、他のユダヤ人研究に基づく言及である。三番目のパターンは、「ユダヤ人」という表現は出ていないが、ユダヤ人の事例を指していると判断できるものである。

一番目のパターンの言及に関しては、例の一つではあるがユダヤ人に特徴的だと思われるものが二か所 (*ibid.* : 60 ; 101, 訳 : 107 ; 172)、いくつかの例の一つであるものが四か所 (*ibid.* : 6 ; 24 ; 100 ; 127, 訳 : 21 ; 49 ; 170 ; 213) という内訳である。テーマ的には主として「スティグマのシンボル」「スティグマ情報の管理」「集団形成」に関するものである。次の引用は、スティグマのシンボルの判断基準の曖昧さを指摘した文章である。

例えば、容姿、身振り、声によって、ユダヤ人のアイデンティティを同定する比較的粗雑な基準と比較せよ。(*ibid.* : 60, 訳 : 107)

また、適応したユダヤ人などの「開示のエチケット」



について言及しているのが次の記述である。

「よい」ユダヤ人または精神病患者は、面識のない人との会話では「適切な時機」を待って、落ち着いてこう言うのである。「ところで、私はユダヤ人であるためこんなふうに感じてしまうのですが……」とか「精神病患者として直接経験した者として私はこう言えるのですが……」と。(ibid. : 101, 訳 : 172)

さらに、「黒人とかユダヤ人などの確立したマイノリティ集団」(ibid. : 127, 訳 : 213-214) のように、スティグマを押された人たち (the stigmatized) [以下「スティグマ者」と表記] の集団におけるユダヤ人の集団形成の特徴について述べた箇所もある。

二番目のパターンは、戦後のユダヤ人研究に基づく記述である。参照している文献は五つあり、六か所 (ibid. : 38 ; 60 ; 101 ; 108 ; 111 ; 113-114, 訳 : 71 ; 107 ; 171 ; 183 ; 187 ; 191) で言及がある。そのうち四つの文献に依拠した箇所では「自らのアイデンティティに対するユダヤ人の両価的感情 (ambivalence)」や「ユダヤ人の自己憎悪 (self-hatred)」とその逆の「ユダヤ人としての自己顕示」といった関連したテーマが問題にされ、ユダヤ人の内面世界に分け入らなければ理解できない力動的心理が叙述されている。次の引用箇所は、J. -P. サルトル (Jean-Paul Sartre) の *Anti-Semite and Jew* (1960) [邦訳『ユダヤ人』] の考察に基づく記述である。

要するに、彼 [ユダヤ人や他のスティグマ者—引用者] は自分の集団を受け容れることも、もう考えないようにすることもできないのである。(Goffman 1963b : 108, 訳 : 183)

三番目のパターンは、「ユダヤ人」とは明示されていないけれども当時の社会状況に照らせば「ユダヤ人」の事柄を指していると判断できるものである。例えば、次の記述を読んだ当時の米国人の頭に最初に浮かんだのはユダヤ人の事例であっただろう。

民族的理由からある種のホテルに宿泊できない人々は、彼の名前から民族的アイデンティティを同定されたのであろう。(ibid. : 61, 訳 : 108)

この記述が、ドイツ系ユダヤ人移民で大成功を収めた銀行家 J・セリグマン (Joseph Seligman) が「ユダヤ人」という理由で 1877 年 サラトガ・スプリングスの グランド・ユニオン・ホテルで宿泊を断られた有名な“事件” (Silberman 1985 = 1988 : 48-49) をはじめ、1950 年代末

まで<sup>(8)</sup>行われていたユダヤ人に対するリゾート・ホテルの宿泊拒否を指しているのは明らかである。

また、「姓名変更」に関する次の叙述の際にゴフマンが念頭に置いていたのは、戦後の 1940 年代後半からユダヤ系米国人の間で盛んに行われた「姓名変更」の申請 (前述) だと思われる。

徴兵忌避者とかモーターの宿泊客がする姓名の変更の狙いは個人アイデンティティの識別の法的側面に向けられているが、少数民族出身者が行う姓名の変更は、社会的アイデンティティの問題が焦点である。

(Goffman 1963b : 58, 訳 : 104) [傍点は引用者]

ゴフマンが「ユダヤ人の姓名変更」に着目していたことは、『スティグマ』第二章の脚注 92 (ibid. : 92, 訳 : 157) で「姓名変更」に関するブルームらの論文 (Broom et al. 1955 : 33-39) を参考文献に挙げていることから裏付けられる。この論文には、1946 年 6 月末から一年間にロサンゼルス州高等裁判所に姓名変更を申請した 1,107 名のうち 46% が「ユダヤ系 (Jewish origin)」だったことが記されている。「ユダヤ人の姓名変更」の問題は、ブルームらの論文だけでなく、当時の新聞や雑誌でも取り上げられていて、戦後の米国において人々の関心事になっていたのである (Fermaglich 2018 : 69-72)。加えて、ゴフマンが『スティグマ』の中で「ユダヤ人の姓名変更」に言及していると思われる箇所は他にもある (Goffman 1963b : 103 ; 106, 訳 : 175 ; 180)。

このように、『スティグマ』を丁寧に読むと、「ユダヤ人」に関する記述は見かけ以上に多いことがわかる。さらに、本書でゴフマンが「異事象併置による透視図法」を用いているという前提に立てば、彼がユダヤ人を念頭に置いて書いた可能性のある箇所をもっと探し当てられるだろう。『スティグマ』における「ユダヤ人」の比重を量的に増やしていくそうした研究方向も確かにあるが、本論考でこの方向でこれ以上考察は進めない。ここで次に検討したいのは、『スティグマ』の代表的な概念と「ユダヤ人」の状況との関連性である。

### (3) 「なりすまし」「塗り隠し」とユダヤ人

ゴフマンが『スティグマ』で示した概念で「スティグマ」の次に有名になったのは「なりすまし (passing)」と「塗り隠し (covering)」だといってよいだろう。でも、この両概念はどこから、どのようにして生まれてきたのか。筆者の見立てでは、これらは米国におけるユダヤ人または黒人の境遇から導き出されたものである。

ユダヤ人と「なりすまし」との関係の深さは、すでに E・V・ストーンクイスト (Everett V. Stonequist) の著書



*The Marginal Man: A Study in Personality and Culture Conflict* (1937) で指摘されていた。同書の「同化となりすまし (Assimilation and Passing)」と題された章で、戦前の反ユダヤ主義の風潮のため「同化」の圧力に晒されたユダヤ人が「なりすまし」というサバイバル戦術を用いたことが述べられている。

それ「支配的な文化 (……) への部分的または全面的な一体化—引用者」は、そうした同化が可能な支配集団の一員としての「なりすまし (passing)」という形態をとることがある。なりすますために個人は、支配集団の一般的な身体的および社会的な特徴を我がものにしなければならない。平等性という点で受け容れられていないユダヤ人は、言葉、名前、その他の社会的な特徴から彼の秘密が暴露されない限り、なりすますことが可能である。(Belluscio 2006: 40) <sup>(9)</sup>

ゴフマンがこの著作から影響を受けたという証拠は見出せないが、ストーンクイストが R・E・パーク (Robert E. Park) の弟子で「シカゴ学派」に位置づけられている点からすれば、シカゴ大学時代にゴフマンがストーンクイストの著作に触れていた可能性は十分にある。

ただ、文献を通じたこの影響関係が確認できなくても、ユダヤ人と「なりすまし」の関係は深かったといえる。反ユダヤ主義が強かった二十世紀前半の米国において、ユダヤ人であることへの自己憎悪からユダヤ的な特徴を徹底的に消し去ろうとした者は、ユダヤ系米国人の間で珍しくなかった。例えば著名なジャーナリストでドイツ系ユダヤ人移民三世であった W・リップマン (Walter Lippman) は、自分がユダヤ人のようにみえないように徹底して情報・印象を管理した。

ウォルター・リップマンは、ユダヤ人としての自己証明を避けた。彼の伝記作家ロナルド・スティールは説明する。／それを彼は、自分が「ユダヤ人のように見えないという事実と、結婚と社交生活、職業上の接触を通じて、主流の白人プロテスタント文化に身を浸すことによって果たした。彼の二度の結婚は、ともに非ユダヤ人とであった。」／ (……) 事実、彼はユダヤ人としての自己証明をまことに上手に避けお世話なので、親友のなかにさえ彼がユダヤ人であることを知らない者がいた。(Silberman 1985=1988: 74)

時代が異なり、他のユダヤ人との関係の取り方も同じではないが、若い頃の E・ゴフマンには、リップマンに似た振る舞いがみられた。ユダヤ人らしさを捨て「ユダヤ人以外の何者か」になろうとした点で「なりすまし」

を実践していたといえる。シカゴ大学で一緒だったユダヤ人 S・メンドロヴィッツ (Saul Mendlovitz) は、大学院時代のゴフマンを次のように描写している。

アーヴィングは、カナダ人のように振る舞い、英国人のように振る舞うユダヤ人だった。(……) 彼は自分がユダヤ人らしいと感じていたが、ユダヤ人らしくはなりたくなかった。彼はユダヤ人以外の何者かになりたかった。彼は、頭に思い描いていた自身の像と一致するような英国紳士に本当になりたがっていた。(Mendlovitz 2009) [傍点は引用者]

また、「なりすまし」概念の源泉に関しては、別の可能性も考えられる。「肌の白い黒人<sup>(10)</sup>」の置かれた状況が「なりすまし」の発想源になったという可能性である。この推測に対する文献的な根拠が『スティグマ』の脚注で挙げられている三つの「黒人」関連本、すなわち R・リーの小説と J・W・ジョンソンの小説、そして J・H・グリフィンのルポルタージュ (Goffman 1963b: 37; 40; 80; 95, 訳: 255; 256; 263; 266) である。

R・リー (Reba Lee) の小説とは *I Passed For White* (1955) で、1960年に同名で映画が公開された。内容はこうである。混血の黒人女性バーニス「白人」に間違えられるほど肌が白い。彼女は故郷シカゴを離れ、改名して生まれ変わろうとする。ニューヨーク行きの飛行機で隣席になった白人男性リックは彼女が黒人と知らず好きになり、結婚を望む。バーニスは彼と結婚するが、その際、自分が黒人であると言わなかった。しばらくしてその「秘密」は彼女の白人の女友達と黒人のメイドの知るところになるが、二人とも夫には隠しておくよう忠告する。そして、バーニスは妊娠する。あるとき彼女は、白人と黒人の間の子に黒人の特徴が現われることがあると書いてある本を読み、それがとても気になる。その本を夫が見つめ、持ち主が妻だとわかり、浮気を疑った彼は妻を問い詰める。結局二人は離婚し、彼女は「秘密」を打ち明けないまま、故郷シカゴに帰っていく。

J・W・ジョンソン (James W. Johnson) の小説 *The Autobiography of An Ex-Colored Man* (1912) も、裕福な白人の父親と黒人奴隷の母親との間に生まれた肌の白い黒人男性が主人公である。音楽家志望であった主人公が実業家として成功するまでの人生を匿名の語り手が回顧する形式で話が展開する。題名に「元黒人 (ex-colored man)」とあるように、主人公が「白人」になりすまし白人社会に紛れて生きてきたという設定である。主人公は黒人に降りかかる災難を避け、生き延び、成功していくために白人になりすますが、心情的には黒人である母親や黒人の生活・社会・文化に共感を抱いている。

J・H・グリフィン (John H. Griffin) の *Black Like Me* (1960) [邦訳『私のように黒い夜』] は、白人の作家グリフィンが内服薬と紫外線照射を用いて自らの肌を黒くして「黒人」になりすまして書いた潜入ルポルタージュである。「黒人」になった彼は、1959年11月初旬からほぼ6週間、米国南部のルイジアナ州・ミシシッピ州・テキサス州などを旅していった。そのとき彼が体験した「黒人」に対する白人からの差別や黒人どうしの関係の実態を日記という形式で描写している。

前二者は「黒人から白人へ」、後者は「白人から黒人へ」と方向は正反対だが、「黒人／白人」の境界線を越えて「なりすまし」体験が綴られている。R・リーの小説に描かれているような黒人主人公の状況設定は、戦前からある黒人の「なりすまし小説 (passing novels)」に共通したものである。J・W・ジョンソンの小説は二十世紀初期の「なりすまし小説」であり、このジャンルではN・ラーセン (Nella Larsen) の小説 *Passing* (1923) [邦訳『白い黒人』] が有名である。

さらに言えば、「肌の白い黒人」と「なりすまし」との関係の深さは、英語の“pass”の語法にその痕跡を残している。すなわち、“pass”の《米語》用法として「(黒人の血を引く者が) 白人として通る」という語義が英和辞典に普通に記載されているのである。この事実から、米国では混血の黒人の間で「白人へのなりすまし」という行為が頻繁になされてきたことがわかる。

以上から、ゴフマンが『ステイグマ』で提示した「なりすまし (passing)」概念の主要な起源は、米国における「ユダヤ人」そして／あるいは「混血の黒人」のサバイバル戦術にあったと考えるのが妥当であろう。

外見では「白人」とほとんど見分けがつかない「白人とは見なされない者」。そして、「白人とは見なされない者」であるという秘密をもちながら、それが発覚しないように生きていく人たち。こうした人たちこそ『ステイグマ』で提示された人間類型「信用を失うおそれのある者 (the discreditable)」(Goffman 1963b: 4, 訳: 18) を体現する人たちであり、WASP社会への「同化」指向の強いユダヤ人と、白人になりすます混血の黒人がその最適の実例である。この点で、見た目で「白人」と区別できない「ユダヤ人」が戦後ユダヤ姓をアングロサクソン風に変えてWASP社会に溶け込もうとしたことも同じ「なりすまし」のようにみえる。

しかし、反ユダヤ主義の意識が弱まった戦後の米国でユダヤ人が「姓名変更」を申請した動機は、戦前のそれとは少し異なっていた。戦前のユダヤ人の姓名変更は、「ユダヤ人」であることをやめ、他のユダヤ人たちとの関係も断ってWASP社会に潜入していくことを目的にしていた。それに対し、戦後、姓を変更したユダヤ人の多

くは、「ユダヤ人」としてのアイデンティティを捨てず、ユダヤ人コミュニティとの繋がりも断たなかったのである (Fermaglich 2018: 87-88)。したがって、WASP社会への応化を目的とした彼らの姓名変更を「なりすまし」と呼ぶのは適切でない。こうしたユダヤ人の印象管理をゴフマンは「塗り隠し<sup>(1)</sup> (covering)」と概念化した。すなわち、「なりすまし」が「本当の社会的アイデンティティ (actual social identity)」(ibid.: 2, 訳: 15) はステイグマ者である人物が「ノーマルな人」という「見かけの社会的アイデンティティ (virtual social identity)」(ibid.) を維持する印象管理であるのに対し、「塗り隠し」はステイグマが可視的 (visible) な状況で当該のステイグマが「ひどく目立つ (obtrusive)」ものにならないようにする印象管理である。ゴフマンは「塗り隠し」について次のように述べている。

このタイプの「塗り隠し」は、マイノリティの民族集団の成員が用いる「同化」の技法のうちで重要な面である。姓名変更や鼻の整形という策略の背後にある意図は、単に「なりすまそう」とすることだけでなく、知られている[ステイグマの]属性が注意の中心に入ってきて非常に目につく (obtrudes itself) のを防ごうとすることでもある。というのも、ひどく目立つということ (obtrusiveness) から、そのステイグマに対して気楽に気づかないふりをし続けることが困難になるからである。(Goffman 1963b: 103, 訳: 175)

例えばラビノウィッツ (Rabinowitz)、ウェインSTEIN (Weinstein) というユダヤ姓をロビンズ (Robins)、ウィンストン (Winston) に変えた戦後のユダヤ人たちは、WASPになりすまそうとしたのではなく、ユダヤ人のアイデンティティに愛着をもちつつもユダヤ人として「目立つ」ことを避けようとしたのである。ユダヤ姓の発音・スベルの難しさが自分が「ユダヤ人」であることを相手に意識させ、円滑な相互行為を妨げる。この種の事態を回避する方策の一つが、ユダヤ姓の音に類似したアングロサクソン姓への変更であった。

ゴフマンが提示したこの「塗り隠し」という独自の操作は、確かに一方で、つねに復活するおそれのある、ユダヤ人に対する排斥や差別を警戒した予防的戦術である。非ユダヤ系米国人の間で弱まってきた反ユダヤの感情も、ユダヤ人が「目立つ」存在になってしまえば、いつまた強まるかもしれない。1960年代初頭にゴフマンが語ったように、ユダヤ人の社会進出を受容していった当時の社会状況も「いつ取り消されるかわからない不安定なものである」(Marx [1984] 2000: 67) という認識を米国のユダヤ人の多くが共有していたと考えられる。

しかしその一方で、「塗り隠し」という操作は、反ユダヤ主義の退潮という米国社会の変化を反映しているといえる。すなわち、ユダヤ人のスティグマ性が弱まりつつある中「ユダヤ人である」ことを秘匿する必要のない社会状況が生まれていったということである。最後に、戦前と戦後の北米ユダヤ人のこの境遇変化が「スティグマ」現象に対するゴフマンの基本的視角に及ぼした影響について考えてみよう。

#### （４）戦前・戦後の北米ユダヤ人の境遇変化と『スティグマ』の基本的視角

反ユダヤ主義の風潮が強かった戦前の社会状況とそれが急速に弱まっていった1950年代から60年前後の社会状況の双方を経験した北米のユダヤ人たちが学び取ったもの、それは、自らの「ユダヤ人」という属性がその人物を取り巻く社会的環境や関わる人との関係によってスティグマにされたりされなかったりする「スティグマの相対性」の認識であっただろう。「ユダヤ人」アーヴィング・ゴフマンも得たと推測される同様の認識が、『スティグマ』で次のように表現されている。

スティグマという用語は、今後、その人物の信用を深く損なう属性を指す用語として使うが、本当に必要なのは関係を表す用語であって、属性を表す用語ではないということが理解されるべきである。(Goffman 1963b: 3, 訳: 16) [傍点は引用者]

ゴフマンがここで挙げているのは、大卒を就職条件とすることの多い米国では一般に「大卒でない」ことがスティグマになる一方で、犯罪者集団では「大卒である」ことが逆にスティグマのように扱われるという例である(*ibid.*)。この例が示しているのは、「スティグマ」とされるどんな属性・経歴も、そのスティグマ性は、それらに内在しているのではなく、その属性・経歴の所有者を取り巻く集団や彼／彼女に関わる人たちによって帰属される特性だということである。ゴフマンは大戦終結後の北米で起こった反ユダヤ主義の鎮静化をそのまま素直に受け容れるようなナイーブな人間ではなかったけれども、ユダヤ人に対する非ユダヤ系米国人の態度変化とスティグマ性の可変性に関しては正しく認識していた。彼はこの認識の一部を「スティグマそれ自体の自然史」(*ibid.*: 32, 訳: 61) という概念に組み込んでいる。

ゴフマンが「スティグマ」現象に対するこうした認識を獲得した理由は、おそらく、ユダヤ人を取り巻く戦後の社会的環境が戦前に比して劇的に好転し、しかもその変化が短期間に起こったことにある。その変化の程度に関して、ゴフマンと同年代で自らも東欧系ユダヤ人移民

二世である学者は、次のように述べている。

第二次大戦終結後、アメリカ社会におけるユダヤ人の地位に起こった重大な変化から、騒ぎや混乱が生まれているのだ。ことに1960年以後、今日のアメリカ系ユダヤ人の生活環境は、それ以前のユダヤ社会がかつて経験したことの無いほど変化した。／その変化はあまりに急激に起きたので、二十代、三十代のユダヤ人は、両親が育ったのとまるでちがった世界に生きるようになったのである。(Silberman 1985=1988: 2-3)

E・ゴフマンが経験した、ユダヤ人の社会的地位をめぐる状況も、戦前と戦後では全く異なっていた。1939年に彼がマニトバ大学に入学したとき、同大にユダヤ人の専任教員はおらず、在学するユダヤ人学生は全学で310人、全学生の11%であった(Bumsted 2001: 88)。圧倒的多数を占めるアングロサクソン系白人の学生友愛会が学園生活の種々の局面で幅を利かせ、ユダヤ人学生は教室以外の学内のほぼ全場面で差別的な扱いを受けた。また、同大では入学選抜でユダヤ人学生を非公式に排斥するクオータ・システムがメディカル・スクールなどで導入されていただけでなく、卒業後も工学系の仕事に就くことはまず望めないという見通しが支配的な状況であった。この状況の中、ゴフマンは三年次にマニトバ大学を中退していった。

ゴフマンがトロント大学修了後に進学した1945年以降のシカゴ大学の状況は、これとは全く対照的であった。教授陣には戦前から教えていたL・ワース(Louis Wirth)やP・ハウザー(Philip Hauser)をはじめ、D・ベル(Daniel Bell)、D・リースマン(David Riesman)、E・シルズ(Edward Shils)やB・ベッテルハイム(Bruno Bettelheim)など著名なユダヤ系の教師が多数おり、大学院生の中にも優秀なユダヤ人がひしめいていた。S・メンドロヴィッツのほか、H・S・ベッカー(Howard S. Becker)、コーンハウザー夫妻(William Kornhauser and Ruth R. Kornhauser)、G・ストーン(Gregory Stone)、R・W・ハーベンスタイン(Robert W. Habenstein)、H・J・ガンズ(Herbert J. Gans)、J・R・ガスフィールド(Joseph R. Gusfield)、F・デーヴィス(Fred Davis)、H・L・ウィレンスキー(Harold L. Wilensky)、R・ジェフリー(Richard Jeffrey)といった後世各分野で有名になる人物をはじめ(Winkin 1988: 29, 訳: 38)、ユダヤ系の俊才たちがゴフマンの大学院在籍期間中の同僚だった(Fine 1995: 387-403)。ユダヤ人たちは、差別されないどころか、彼らの努力と能力で目覚ましい活躍をみせていた。ユダヤ人が活躍する姿は、シカゴ大学や社会科学分野だけでなく、学術界全般でみられた。



第二次大戦後のアメリカの学者や知識人の中で、ユダヤ系の人びとの活躍が際立ったことは、感嘆すべきことである。東欧ユダヤ移民の二世で、父は職人や労働者だった人が第一級の学者や知識人となり、しかもアメリカ史やアメリカ文学の研究において重きを成した人が続々と現われたことに、アメリカ社会の独特の活力の源泉を見ないわけにはいかない。(本間 1998 : 146)

「ユダヤ人」という同一の地位・属性に対する評価の“乱高下”を経験したことがゴフマンに「スティグマ性の可変性」の認識をもたらしたというのが筆者の仮説であるが、彼が『スティグマ』において到達した認識はそこにとどまらない。ある地位・属性のスティグマ性が社会環境の変化によって衰微あるいは消散することはあるけれども、「ノーマルな人／スティグマ者」という区分自体は存続する。ゴフマンが本書の後半部で扱っているのが、「スティグマ」現象をめぐるこの次元の問題である。それまで「スティグマ者」とされてきた人たちが「ノーマルな人」の範疇に移動しても、別のグループの人たちは「スティグマ者」の範疇内に取り残されたり、新たに「スティグマ者」に位置づけられる人が出てきたりする。実際、ユダヤ人は「ノーマルな人／スティグマ者」の「スティグマ者」から戦後いち早く脱出したが、黒人は「スティグマ者」の枠内にとどめ置かれた。

また、「スティグマ」現象でゴフマンが注目するのは、スティグマ者として差別される側にも「よりノーマルに近い者／よりスティグマが強い者」を区別する差別意識が存在していることである (Goffman 1963b : 107, 訳 : 181)。例えば難聴の人は「自分は聾者ではない」と考え、視覚に障害のある人は「自分は失明者ではない」と考えて、ノーマルな人がスティグマ者に対して取る態度と同様の態度を彼らは示す。これと類似した現象が「ユダヤ人」の中にも存在した。『スティグマ』では触れられていないが、戦前の北米で差別されていたという「ユダヤ人」は、実は、「望ましいユダヤ人」と「望ましくあらざるユダヤ人」に分けられていた (佐藤 2000 : 162)。すなわち、ユダヤ人北米移民の子孫・子弟の間に「ドイツ系ユダヤ人の子孫／東欧系ユダヤ人の子弟」という区分線が引かれていた (薄井 2018 : 2-4)。1840年代から70年代に渡ってきて北米社会に同化していたドイツ系ユダヤ人移民の子孫は、東欧系ユダヤ人の子弟に比べて「ノーマルな人」に近い扱いを受け、大学入学者選抜のクォータ・システムで差別されなかった。ドイツ系ユダヤ人は、彼らも一定の差別を受けていながら、北米で東欧系ユダヤ人移民の子弟を苦しめたクォータ・システム

に対してはWASP寄りの態度を取っていたのである。

彼ら〔ドイツ系ユダヤ人の在學生や同窓生—引用者〕はネイティブ白人プロテスタント系学生集団と同様、東欧系ユダヤ人学生たちの貧しさ、その粗野なふるまい、そして何よりも競争を是とする価値観に当惑し、それがゆえに東欧系を疎んじていた。そして、多少の疑念を覚えながらも東欧系ユダヤ人に対するクォータ・システムの導入を黙認する傾向があった。(佐藤 2000 : 163)

ゴフマンがこの事実を認識していたという証拠は見出せないが、東欧系ユダヤ人移民の子でありカナダの大学に入ったことのある彼がこの類いの事実を知らなかったとは考えにくい。少なくとも二十世紀前半期には「旧移民」のドイツ系ユダヤ人の子孫と「新移民」の東欧系ユダヤ人の子弟とでは親の職業<sup>(12)</sup>や家庭環境に画然たる差があったので、「ユダヤ人」の中にある“階級”構造を当然彼は認識していたはずである。したがって、ゴフマンの目には「スティグマ」現象が、「差別する側／差別される側」＝「WASP／ユダヤ人」というような単層構造ではなく、「差別する者／差別される者」が入れ子的に入り組んだ重層構造として映っていたと思われる。

そして、「スティグマ性の可変性」の認識から「スティグマ者の相対化」に至ったゴフマンは、さらに「ノーマルな人の相対性」の認識に行き着く。スティグマ者の劣等感とは無縁に見える「ノーマルな人たち」であっても、彼らがスティグマになり得る情報を一切隠しもっていないということはあり得ないから、「信用を失うおそれのある者 (the discreditable)」(Goffman 1963b : 4, 訳 : 18) という人間類型は、スティグマ者の一部にのみ当てはまる規定ではない。それは、ノーマルな人を含む「全ての人」に当てはまる存在様態である。このように、彼は当初の視角を拡張して、「ノーマルな人—スティグマ者」に関する一般化された枠組みを構築していく。

ノーマルな人たちの中で最も恵まれた人であっても半ば隠された欠点があるだろうし、個々の小さな欠点が大きく見え、見かけの社会的アイデンティティと本当の社会的アイデンティティとの間に食い違いが生じて恥をかかせるような社会的場面は存在している。したがって、ときどき立場が危うくなる人とつねに立場が危うい人とは単一の連続体を形成しており、両者の生活状況を同一の枠組みで分析することができる。(Goffman 1963b : 127, 訳 : 214)

ゴフマン特有の「連続体」の思考によって「ノーマル

な人／スティグマ者」の区分線は融解し、両者の関係は徹底して相対化されることになるけれども、だからといって、ゴフマンの「スティグマ」論の眼目は、「スティグマなど存在しない」といったスティグマの否定にはない。むしろ、「ノーマルな人／スティグマ者」の区分を個々の相互行為場面に現出させ、「スティグマ者」をミクロ次元およびマクロ次元で産み出していく装置＝「パースペクティヴ」の存在を指摘している点こそが、彼の「スティグマ」理解の核心部分である。少々長いが、重要な主張なので、該当箇所を引用しておこう。

結論的にいえば、スティグマとは、スティグマ者とノーマルな人という二つの柱に分離される具体的な個人の集まりというより、どの個人も、少なくともいくつかの交渉や人生の諸局面では、どちらの役割にも加わる二者の役割という一般的な社会過程である。ノーマルな人とスティグマ者とは、個々の人物ではなく、むしろ個々のパースペクティヴである。これらのパースペクティヴは、ノーマルな人とスティグマ者とが接触する対人社会的状況において、意識されない規範によって生み出され、その対面的相互行為に影響を及ぼす。特定の個人が生涯もつ属性によってその個人は型にはまった役割にはめ込まれるかもしれない。その個人は、ほとんど全ての対人社会的状況においてスティグマ者の役割を演じなければならないかもしれないし、その個人をスティグマ者と見なすことによって彼らの生活状況が彼をノーマルな人たちと対極的な位置に置くことが自然だと考えるかもしれない。しかし、その個人がもつ特定のスティグマ的属性は、ノーマルな人とスティグマ者という二つの役割の性格を決定するものではなく、二つのうちの特定の一つの役割をその個人が演じる頻度を決定するだけである。そして、関係しているのは、具体的な個々人ではなく、相互行為役割であるから、ある点でスティグマ者である人が、別の点でスティグマ者である人に対して、ノーマルな人たちが抱く偏見を明確な形で示すことがあるとしても、全く驚くには当たらない。(ibid. : 137-138, 訳 : 231-232) [傍点は引用者]

こうした認識が生まれたのは、おそらく、「スティグマ」現象が単なる観念ではなく個々の場面でリアルな力をもって作動する観念－行為システムであることをゴフマンが実感していたからであり、またスティグマによって自己憎悪に陥る人たちや自分のスティグマを恥じ「私はノーマルな人になる」と適応戦略に走る人たちはもちろん、自らの地位・属性のスティグマ性を否定し「私はノーマルだ」と異議を申し立てる人たちも結局は「ノー

マルな人／スティグマ者」の図式に搦め捕られていることに彼が気づいていたからである。もしかすると、自己のスティグマに対処していくこれらの人物像は、それぞれがアーヴィング・ゴフマンのある時期の姿<sup>(13)</sup>だったのかもしれない。いずれにせよ、確実なのは、スティグマ者そしてノーマルな人として数多くの体験を経てきた人でなければ、しかも、スティグマ者、ノーマルな人のどちらの立場にも等しく立つことができ、どの特定の立場にも拘泥しない自由な態度をもった人でなければ、上記のような透徹した認識には到達できなかっただろうということである。

#### 4. 結びに代えて

以上、米国におけるユダヤ人の社会的地位に関して、戦前の反ユダヤ主義の強まり、そして、特に第二次大戦終結後の反ユダヤ主義の急速な退潮という歴史的な変化に着目して、アーヴィング・ゴフマンの著書『スティグマ』の読解を試みた。完全に論証されたわけではないけれども、「なりすまし (passing)」概念の由来やそれと「塗り隠し (covering)」概念との差異といった論点は、二十世紀の米国社会におけるユダヤ人や黒人の歴史を参照する作業によってしか解明できないことは、明らかになったと思う。また、「ノーマルな人－スティグマ者」関係の相当入り組んだ構造は、戦前期に差別を受けたユダヤ人内部の集団関係や戦後のユダヤ人和其他のスティグマ者との関係などを踏まえなければ十分に理解できないという点も、ある程度示すことができたと考える。

しかし何より、歴史社会的な文脈およびゴフマンの個人的な文脈の中でこの著作を読み解くという視角が求められる理由は、ゴフマンがなぜ『スティグマ』を著したのかという根本的な疑問に答えを出すために不可欠だからである。

確かにゴフマン自身の研究履歴からいうと『スティグマ』の最初のヴァージョンは「精神病患者」のスティグマを扱った小論であったし (Goffman 1963b: preface, 訳 : 247)、著作公刊の順番からいっても『アサイラム』 (Goffman 1961a) が『スティグマ』 (1963b) に先行している。これらの事実に適合するストーリーは、精神病患者に関心をもっていたゴフマンがそのテーマを発展させる形で『スティグマ』を著したというものだろう。しかし、精神病患者のスティグマを扱った小論の公刊 (1957年) と『スティグマ』の公刊 (1963年) との間に6年という期間が介在し、4頁の小論は147頁の著作にまで成長しているという点、また『アサイラム』が基本的にゴフマン自身の参与観察調査に基づいて書かれているのに対して、『スティグマ』執筆のために彼自身によ

るフィールドワークや調査は一切行われていないという点で、『アサイラム』でのゴフマンの問題意識と『スティグマ』での彼の問題意識、そして彼の社会学における『アサイラム』の位置づけと『スティグマ』の位置づけとは、大きな違いがあったのではないかと推測される。もちろん『スティグマ』には「精神病患者」のスティグマの事例も記されているが、それはあくまで、多種多様な「スティグマを押された人たち」の一例でしかない。したがって、「精神病患者」の問題から「スティグマ」の問題が単線的に発展してきたとは考えられない。

それでは、E・ゴフマンにおいて「スティグマ」の問題はどこから生まれてきたのか。話は本論考の冒頭に戻ってしまうが、やはり、彼が「東欧系ユダヤ人カナダ移民二世」であったことが最も重要な要因となっていると素直に考えるべきであろう。「ユダヤ人」という観点から『スティグマ』を理解するという視角は、ほとんどのゴフマン研究者が一度は思いつく切り口であり、基本的に正しい視角だと筆者は思う。『スティグマ』を執筆するためにゴフマンがフィールドワークや調査をしていないという事実は、フィールドワークに匹敵する体験がすでに彼自身の中に蓄積されていたことを物語っているのだろうか。次の引用は、E・ゴフマンが自身の出自に関して述べた発言をエディンバラ大学のときの同僚T・バーンズ（Tom Burns）が伝え、論評を加えたものだが、その内容全体は、バーンズが否定しようとした意図とは反対に、ゴフマンが東欧系ユダヤ人カナダ移民二世であったことが彼に『スティグマ』を書かせる要因になったというストーリーを支持するものになっている。なぜなら、「ユダヤ人」が「スティグマ」とされる事態とは、「出自」が「他者に目印を付ける手段」として使われることに他ならないからである。

「ユダヤ人であるということ、しかもロシアのユダヤ人であるということは、私について多くを説明してくれる」<sup>(14)</sup>と彼は考えていたか、少なくとも彼はそう言ったけれども、私[T・バーンズ—引用者]はそうは思わない。私たちと同様に彼は、出自というものが、自分自身が何者であるかを説明する手段というよりも他者に目印を付ける手段であると見ていた。（Burns 1992：9）[傍点は引用者]

ただ、少なくとも言えるのは、本論考で採った「東欧系ユダヤ人移民二世としてのアーヴィング・ゴフマン」という見方で『スティグマ』を読んでいくと、いくつもの“発見”があるということである。そうした“発見”は、E・ゴフマンを単に「カナダ生まれの米国の社会学者」と見なす研究視点からは、決して生み出されないも

のである。英文でわずか150頁弱の本ではあるが、「ユダヤ人」アーヴィング・ゴフマンに関連する“未発見”の知見がまだ数多く『スティグマ』の文章の背後に潜んでいるはずである。

#### [注]

- (1) E・ゴフマンが「ユダヤ人移民の子」であったことを取り上げているゴフマン研究はいくつか存在している（Winkin 1988；Cavan 2014；Shalin 2014）。しかし、彼が東欧系ユダヤ人移民二世であったことが彼の社会学理論の形成にどのように関係しているかを考察したものは皆無だといってよい（薄井 2018：1）。
- (2) 戦前にクォータ・システムを導入した全ての大学が戦後すぐにそれを廃止したわけではない。アイヴィー・リーグのうち、プリンストン大学とイエール大学は1950年代後半までクォータ・システムを非公式に続けていた（Fermaglic 2018：74）。
- (3) D・ロング（Dennis Wrong）は、カナダ生まれの米国の社会学者で、のちにニューヨーク大学の名誉教授になった人物である。彼の祖父はカナダの歴史学者でトロント大学で教授・学科長、およびカナダ王立協会のフェローを務め、父はトロント大学の歴史学教授に就いた後、駐米カナダ大使となった。D・ロングはE・ゴフマンより一歳若かった。
- (4) E・ボット（Elizabeth Bott）は、ゴフマンがトロント大学在学中に恋人関係になった女子学生である。彼女の両親はともに心理学者で、父エドワードはトロント大学心理学科の創設者、母ヘレンは子どもの発達心理の研究者であった。
- (5) このヴァンカンの著書とゴフマンの著作で邦訳書があるものの訳文に関しては、該当する頁数は表記しているが、訳文をそのまま掲載していない。適宜、筆者が訳し直している。
- (6) その他に、他の事例に託してゴフマンが自身のことを述べていると読むこともできる記述がある。

近年の歴史において、特に英国で顕著だが、万が一にも下層階級出身の子が出身家庭からみて不適切なほど高い地位に上り詰めた場合、下層階級という出自は重要な種族のスティグマの働きをする。すなわち、親のスティグマが子に罰を与えることになる。（Goffman 1963b：14，訳：248）[傍点は引用者]

アーヴィングの父マックスは商人だったし、両親



ともウクライナからのユダヤ人移民であった。その息子が有名大学の教授になったのだから、傍点を付した箇所はE・ゴフマンの境涯そのものであろう。

- (7) ゴフマンが「私たちノーマルな人たち (we normals)」(Goffman 1963b: 5, 訳: 19) という表現を用いている点も、彼の“ひねった”書き方に関係していると筆者は考える。ゴフマン自身が「ユダヤ人」=「スティグマ者」であったわけだが、著者という立場にかこつけてユダヤ人である自分を「ノーマルな人」の側に置く表現を用いている。もちろん、彼はこの表現に皮肉を込めているのかもしれないし、戦略的な意図をもってこの表現を使っているのかもしれない。いずれにせよ、ゴフマンの叙述スタイルに“ひねり”の要素が持ち込まれている可能性は高いと思う。
- (8) 例えば、『紳士協定』の中で描かれたような、ユダヤ人を締めだすリゾート・ホテルは、1950年代半ば過ぎには全体の四分の一に減り、さらにその五年後までにはほとんど消滅してしまった」(本間1998:77)という指摘がある。しかし、「社交クラブ」からのユダヤ人排斥はそれ以後も続いていたようである。
- (9) ストーンキストの原典にあたることができなかった。この引用は、バレーシオが引用したストーンキストの英文を筆者が訳した再引用である。
- (10) 1910年代から60年代まで米国の多くの州で「ワンドロップ・ルール [血の一滴の掟]」という人種分類の原則が制度化されていて、サハラ砂漠以南のアフリカ諸国出身者が祖先に一人でもいれば、すなわち黒人の血の「一滴 (one drop)」でも混じっていれば、「黒人」に分類されていた。したがって、ほとんど「白人」と変わらない肌の色をした人でも「黒人」に分類される人がいたのである。
- (11) ゴフマンの用語“covering”に対して現在の邦訳書では「擬装工作」という訳語があげられている。全く不適切とまではいえないが、堅くて仰々しい印象は否めない。筆者の理解では、“covering”は「目立たなくする操作」を指す。“covering”の元の動詞“cover”がごく日常的に使う言葉であることを勘案して、「塗り隠し」とした。例として適切かどうかかわからないが、「顔のシミをファンデーションでカバーする」といったイメージである。すなわち、シミがあることを完全に隠匿するのではなく、シミがあることは何となくわかるが、それを目立たなくするような操作を指す訳語として用いる。
- (12) 北米へのユダヤ人移民の第二グループに属するドイツ系ユダヤ人移民の多くは、貧しい行商人から出

発したが、短期間に社会的上昇を成し遂げ、十九世紀末には全体の四分の三が実業家、ホワイトカラー、専門職に就いていた。時期は後ろにずれるが、1909年生まれのD・リースマン (David Riesman) もドイツ系ユダヤ人移民の二世であった。彼の父は、ドイツから米国に移り住んできたユダヤ人であったが、渡米後ペンシルヴェニア大学メディカル・スクールの教授になった。D・リースマンはハーヴァード大学を卒業し、同大のロー・スクールを修了している。それに対し、E・ゴフマンの父が衣料品店の店主であったように、ユダヤ人北米移民の第三グループである東欧系ユダヤ人移民は行商人や小売店主、米国では衣料品工場労働者などが多かった。

- (13) 『スティグマ』の中で、スティグマ者の「帰属感の周期」に関して「例えば青年期 (……) には所属集団との同族意識がきわだって縮小し、ノーマルな人たちとの同族意識がきわだって増大する」(Goffman 1963b:38, 訳:71) と指摘されているが、この傾向がユダヤ人に顕著にみられることが調査研究でわかっている。この態度は、高等学校時代からユダヤ教とユダヤ人に対して距離を取っていったE・ゴフマンにもあてはまる。
- (14) バーンズの著書の英文では、引用符内の発言は間接話法で書かれている。筆者がそれを直接話法に直して訳出した。

## [文献]

- Belluscio, Steven J., 2006, *To Be Suddenly White : Literary Realism and Race Passing*, University of Missouri Press.
- Broom, L., Beem, H. P., and Harris, V., 1955, “Characteristics of 1,107 Petitioners for Change of Name,” *American Sociological Review*, 20 : 33-39.
- Bumsted, J. M., 2001, *The University of Manitoba : An Illustrated History*, University of Manitoba Press.
- Burns, Tom, 1992, *Erving Goffman*, Routledge.
- Cavan, Sherri, 2014, “When Erving Goffman Was a Boy : The Formative Years of a Sociological Giant,” *Symbolic Interaction* 37 ( 1 ) : 41-70.
- Dinnerstein, Leonard, 1994, *Anti-Semitism in America*, Oxford University Press.
- Fermaglich, Kirsten, 2018, *A Rosenberg By Any Other Name*, New York University Press.
- Fine, Gary A. (ed.), 1995, *A Second Chicago School? : The Development of a Postwar American Sociology*, The University of Chicago Press.

- Gardner, Carol B., 1999, "Fine romances : two arrangements between the sexes in public places," in Greg Smith (ed.), *Goffman and Social Organization*, Routledge.
- Goffman, Erving, 1952, "On Cooling the Mark Out : Some Aspects of Adaptation to Failure," *Psychiatry : Journal for the Study of Interpersonal Processes* 18, 3 : 213-231.
- , 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday Anchor. (= 1974, 石黒毅 訳『行為と演技—日常生活における自己呈示—』, 誠信書房.)
- , 1961a, *Asylums : Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other inmates*, Doubleday Anchor (= 1984, 石黒毅 訳『アサイラム—施設被収容者の日常世界—』, 誠信書房.)
- , 1961b, *Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merrill Company, Inc. (= 1985, 佐藤毅・折橋徹彦 訳『出会い』, 誠信書房.)
- , 1963a, *Behavior in Public Places : Notes on the Social Organization of Gatherings*, Free Press. (= 1980, 丸木恵祐・本名信行 訳『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて—』, 誠信書房.)
- , 1963b, *Stigma : Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc. (= 2001, 石黒毅 訳『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ—』, せりか書房.)
- 本間長世, 1998, 『ユダヤ系アメリカ人—偉大な成功物語のジレンマ』, PHP.
- Marx, Gary T., [1984] 2000, "Role Model and Role Distance : A Remembrance of Erving Goffman," in G. Fine & G. Smith (eds.), *Erving Goffman* [ 1 ], Sage.
- Mendlovitz, Saul. , 2009, "Erving Was a Jew Acting Like a Canadian Acting Like a Britisher," in D. N. Shalin (ed.), *Bios Sociologicus : The Erving Goffman Archives* ([http://digitalscholarship.unlv.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1048&context=goffman\\_archives](http://digitalscholarship.unlv.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1048&context=goffman_archives)) [2019年 8 月26日閲覧]
- Poliakov, Léon, 1994, *Histoire de l'antisemitisme 1945-1993*, Edition du Seuil. (= 2007, 菅野賢治・合田正人・小幡谷友二・高橋博美・宮崎海子 訳『反ユダヤ主義の歴史[第V巻]:現代の反ユダヤ主義』, 筑摩書房.)
- 佐藤唯行, 2000, 『アメリカのユダヤ人迫害史』, 集英社.
- Shalin, Dmitri N., 2014, "Interfacing Biography, Theory and History : The Case of Erving Goffman," *Symbolic Interaction* 37 ( 1 ) : 2 -40.
- Silberman, Charles E., 1985, *A Certain People : American Jews and Their Lives Today*, Summit Book. (= 1988, 武田尚子 訳『アメリカのユダヤ人:ある民族の肖像』, サイマル出版会.)
- 薄井 明, 2013, 「ゴフマンの『隠れジンメリアン』疑惑—従来のゴフマン理解の見直し—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 第20号.
- , 2016, 「羽化したばかりのゴフマン社会学—第二公刊論文(1952)に関する一考察—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 第23号.
- , 2017, 「若きゴフマンの知的生活誌—高等学校時代と大学時代—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 第24号.
- , 2018, 「アーヴィング・ゴフマンはなぜ化学の勉強を続かなかったのか?—北米の反ユダヤ主義がゴフマンの人生行路と彼の社会学に与えた影響に関する一仮説—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 第25号.
- バーダマン, ジェームス・M. , 2007, 『黒人差別とアメリカ公民権運動』, 集英社.
- Winkin, Y., 1988, *Les Moments et Leurs Hommes*, Seuil/Minuit. (= 1999, 石黒毅 訳『アーヴィング・ゴフマン』, せりか書房.)
- Wrong, Dennis., 1990, "Imaging the Real," in Bennet M. Berger (ed.), *Authors of Their Own Lives: Intellectual Autobiographies by Twenty American Sociologists*, Univeristy of California Press.

# Erving Goffman, a Son of Jewish Immigrants, and His Book *Stigma* : On an Influence of the Change in the Social Status of Jewish People in North America in the 20th Century upon Goffman's Sociology

Akira USUI\*

**Abstract :** This essay is an attempt to situate Erving Goffman's book *Stigma* in its historical and his personal context. The book *Stigma* was published in 1963 just after Goffman who had dropped out of the University of Manitoba because of anti-Semitism in wartime Canada was promoted to full professor at the University of California, Berkeley. The tide of anti-Semitism in North America that had marked the high-water mark just before the end of the Second World War ebbed fast after the war. When Goffman wrote his book, the social circumstances in which Jewish Americans lived their lives improved dramatically and the United States was becoming a place free from discrimination against them. At that time, however, most of Jewish people in US including E. Goffman didn't feel that their social status was as equal as that of Anglo-Saxon whites. The stigma that formerly attached to Jews had diminished but hadn't disappeared yet. Name change among Jewish Americans was an adaptive and defensive tactics which Goffman called "covering" in *Stigma*, while "passing" was a kind of impersonation used by very light-skinned mulattoes, and Jews fully assimilating to American society in the first half of the twentieth century. Goffman who had seen the rise and fall of anti-Semitism, experienced both downward social mobility due to anti-Semitism and upward social mobility by his own ability and efforts, and learned that there are discriminations among the stigmatized and shameful differentnesses among the normal finally understood that "[t]he normal and the stigmatized are not persons but rather perspective."

**Key Words :** Erving Goffman, Jewish immigrants, anti-Semitism, Jewish Americans, *Stigma*, passing, covering

---

\* Center for Education in Liberal Arts and Sciences